



©Yuki Asada

## 織物に生まれ変わったバナナ

ラオス南部サラワン県のホアイフン村。年中暑いこの国では珍しく、比較的涼しい山間部に位置する少数民族の村では、日本人にもおなじみのバナナの栽培が盛んだ。

今までは“食べる”だけだったこのバナナを使って、最近、ちょっとした変化が起こっている。収穫後に捨てていたバナナの茎の繊維を糸にし、その糸で布を織って小物を作ろうという試み。JICAの支援を受けて村の女性グループが立ち上がり、村のPRにつながる新しい特産品の開発が進行中だ。

“バナナ糸”を作るには、まず茎の皮を一枚一枚はがし、ヘラで不純物をそぎ落として繊維を抽出。乾燥させてから一

本一本結んで糸にして植物で染色する。最後に、村に代々伝わる織機で布を織るという手順だ。大変手間のかかる作業だが、多摩美術大学からも技術指導を受けながら、毎日懸命に作業に取り組んでいる。「バナナの繊維を使った織物は、ラオスでは初めての試み。村の女性たちも誇りを持って取り組んでいます」とプロジェクトリーダーの米坂浩昭さん。村のマーケットだけではなく、最近、首都ビエンチャンなどでも販売が始まった。

「もっと良いものを作って、いずれは日本にも輸出したい」と目を輝かせる女性たち。バナナから生まれた織物を手に取ると、そんな彼女たちの優しさが伝わってくるようだ。



村の人々が受け継いできた後帯機と呼ばれる織機を使って丁寧に作業する

★ランチョンマットを2人、巾着袋、小物入れを各1人にプレゼント!→詳細は38ページへ

